

第4章

なぜ館林広域圏が日本のフードバレーになるのか？ 9つの理由

理由 1

このエリアは、利根川と渡良瀬川と渡良瀬遊水地に囲まれた内陸型ウォーターフロントである。館林・邑楽には「里沼」という水の景観と利用の歴史的文化がある。板倉には水塚など洪水と共存してきた「水場」文化がある。明和・千代田・大泉には利根川を利用した「渡船・水運」文化がある。

理由 2

このエリアの地下には利根川水系、渡良瀬川水系、栃木山系からの清らかな伏流水が豊富にある。これが「館林の天然水」である。

理由 3

「館林の天然水」の利用を目的に日本有数の食品・飲料会社*が工場・研究所を立地している。地元の伝統的な醸造会社を含めて、食品産業クラスター（集積した企業グループ）が存在し、プレ・フードバレーが形成されている。

したがって、フードバレーの中核になるアグリ・フード・バイオ・デジタル・アートの最先端総合大学を創立・発展させることが現実的課題である。

*正田醤油、日清製粉、味の素、サントリー、ブルドックソース、ミツカン、アサヒ飲料(カルピス)、日本水産その他。

理由 4

このエリアには多くの農地があり、耕作放棄地が増え続けている。

理由 5

このエリアは関東地方の中央に位置している。ここを起点として同心円状に農業産地、食品工場、農業・食品の研究機関（大学・研究センター）があるようにも見える。その場合には、このエリアはそれぞれの農業関連サイトへ放射状に効率よく移動できる中心点になっている。

理由 6

このエリアは世界的大都市・東京という大消費地・大観光地へアクセスする立地アドバンテージをもち、もう一つの大観光地・日光への中間地点・休憩地でもある。東京からこのエリアまでの時間が、東北道・自動車で60分、東武伊勢崎線・特急列車で60分である。東武日光線・板倉駅とJR新幹線・熊谷駅の乗降圏内でもある。

このエリアの北部には50号線があり、これが北関東（群馬、栃木、茨城）を横断するルートとなり、東の空港・海港へのアクセスルートになっている。

このエリアは上越道、東北道および50号線のクロスポイントの内側にあり、物流、商流、人流の交流地としての大きな可能性をもっている。

理由
7

このエリアは多くの空いている土地をもっているため、将来確実に起こる首都直下地震に備えた政治・経済・文化のバックアップ施設＊を建設するために適している。ただし、ここは沖積平野であるため、耐震工事が必要である。

＊もしこのエリアにヘリコプター基地・東京復興資材ターミナルがあるならば、首都への道路が遮断されたとしても、地震直後から人的かつ物的な輸送が可能である。また、ここは永田町からヘリコプターで20分である。東京復興の総司令部インテリジェントビルエリアも建設し、首相官邸・中央官庁のバックアップ機構を稼働させ、永田町と館林市を交代で利用するという構想はどうか。

＊東京農工大学、東京工業大学、東京医科大学、一橋大学、お茶の水大学、東京芸術大学が連合して、このエリアに「国際共同キャンパス」を建設する構想はどうか？大震災前に大学の機能の一部を移転・使用し、震災後に直ちに全面的に移転・稼働できるように予め施設・設備・備品を準備万全な状態で建設・設置しておく。

これが日本版ワーヘニング大学、すなわち「たてばやし大学」のプラットフォームになる構想はどうか？農業・食品・健康・医療分野の政府系R&D機関も一緒に移転する構想はどうか？これらの分野の民間企業の本社・研究所のバックアップ施設を誘致する構想はどうか。

確実視される地震が起きるまえに、移転しよう。

＊このエリアに人口25万人の国際科学都市「フードバレー・スマートシティたてばやし」が建設されたとき、新生館林市が太田・足利・佐野・古河・行田・熊谷などの周辺都市と連携することによって、100万人都市が関東平野の中央に形成される。この都市圏は、里沼および渡良瀬遊水池ならびに利根川および渡良瀬川を抱いているので、全地域を田園・森林公園都市に指定し、夏の猛暑や水害に対処する。この都市は、アメリカ・ポートランド市のような環境先進都市であり、21世紀の日本の「グリーン・キャピタル（環境首都）」になる。

理由
8

館林市には館林城と城下町の遺構がある。館林市は、明治以降もいち早く近代産業を興し、銀行を設立し、鉄道を開通させた都市である。それゆえ、ここには歴史・文化に高いプライドをもち企業家精神に富んだ未来志向の人々がいる。

理由
9

上記の理由を超えた立地アドバンテージをもつフードバレー候補地が、日本のほかの地域にはない。

おわり